

中学校運動部活動における「競技成績」への起因事項

An origin matter to competition results in junior high school athletic club activity

1K03A212-1

氏名 宮川尚久

指導教員 主査 間野義之 先生 副査 礪繁雄 先生

【緒言】

現在に至るまで、日本の運動部活動は数々の変遷を遂げている。その変遷の中で様々な問題が生じ始めた。例えば、顧問の時間的負担問題や顧問の専門的知識の不足などがあげられる。また、少子高齢化などの社会背景も運動部活動に大きな影響を与えている。それは部員数の減少といった運動部活動の存続自体が危惧されるものとなっている。

筆者はこうした運動部活動の現状を教育実習または外部指導の機会を経て経験した。その中で運動部活動のあるべき姿を思慮するようになった。運動部活動が教育的価値を見出していること(本研究ではこの文意を「生徒の継続」の視点でとらえている)、また教育白書の中で「運動部活動はより高い水準の技能や記録に挑戦する場」ともあることから、筆者は「生徒が運動部活動に求めていること」と「指導者の運動部活動における方針」の一致(生徒の継続要因)が「競技成績のよさ」に結びつくことが運動部活動のあるべき姿だと考え研究を行うことにした。その仮説として「生徒が部活動に求めること(競技性・娯楽性・仲間は問わない)」と「指導者の運動部活動における方針」が一致するほど、「競技成績はよい」を検証することとした。また、指導経験から生徒の中に「より勝ちたいと思う人数が多い」ほど「競技成績はよい」という可能性も十分に感じたのでこれを第二の仮説として分析することにした。

そして、この両結果を検討し「競技成績」への起因事項を抽出し、今後の運動部活動の方針や組織機構について考察していくものとする。

【研究方法】

習志野市をフィールドとし以下のような調査を平成 18 年 10 月に実施した。

- ・ 調査対象母集団：習志野市内の公立中学校の野球部 1・2 年生と野球部顧問
- ・ 調査対象者数：生徒 186 名、顧問 10 名
- ・ 調査方法：質問用紙調査 インタビュー調査
- ・ 有効回収率：100%

以上のような調査によって得られたデータを統計ソフト・SPSSを使用して分析を行った。

主眼として、調査項目間の差を検定するために一元配置分散分析を行った。また多面的に一元配置分散分析や相関分析を行い関係性の検討を行った。

【結果・考察】

分析の結果、「生徒が部活動に求めること(競技性・娯楽性・仲間は問わない)」と「指導者の運動部活動における方針」が一致するほど、「競技成績はよい」という仮説の検証は統計的に立証されなかった。この背景には、中学校運動部活動の体質(学校規則による活動時間の制限)や運動部活動の定義(競技成績だけを重視するのではなく、教育活動の一環であるという立場)が生み出す、指導者の方針の浸透力の薄さ、そして方針の点在化がもたしているのではないかと考えられる。そもそも活動の主体は生徒にあり、本研究の主題の結果は、生徒の気質・性格に競技成績が左右されるという可能性を高めることになった。そして第二の仮説の信憑性を高めるものとなった。実際に第二の仮説である、生徒の中に「より勝ちたいと思う人数が多い」ほど「競技成績はよい」を分析したその結果は非常に顕著なものとして立証された。では、こうした結果を受け、競技成績を高めるために顧問は何もしなくてよいわけではない。生徒に勝つ喜びを与え「より勝ちたい」という意欲を出させるよう仕向けることが大切である。一方、各顧問が口をそろえて言うように、運動部活動は勝つことがすべてではない。実際の調査・分析で競技成績がよいチームには「練習時間を短くしてほしい」などのマイナス要素の潜在化も確認された。顧問はこうした潜在化の状況まで与していかななくてはならない。また、本研究では顧問からの回答において外部指導者の有意義が確認された。外部指導者は現在の運動部活動の問題を解消するためにも非常に重要な取り組みであると考えられる。

【まとめ・課題】

本研究により現在の運動部活動の問題を解消する要因(「生徒が部活動に求めること(競技性・娯楽性・仲間は問わない)」と「指導者の運動部活動における方針」が一致するほど、「競技成績はよい」)は立証されなかった。しかし、組織機構や方針を検討できる多くの事項が確認できた。今後は時代の流れによりさらなる変化が起こりうる。また生徒の多様な価値観は今後も継続されていくことであろう。そうした中、必要なのは顧問や学校側が変化に対して俊敏に対応できる能力、柔軟性を身につける努力をする姿勢であると考えられる。